

私の推薦図書⑤日本

企業経営漫談士 岡野実空

「事業力」「人間力」の裾野として、「地球」と「世界」に続くテーマは、我が「日本」および「日本人」。その推薦候補の中からまず選んだのは、我が国名うての賢人たちによる、ユニークな「日本史」の小論および討議集。そしてそれに続くのは、我が国が近代化によって失ったもの、あるいはいまなお私たちが持ち続けている特性を知るために恰好な図書2冊です。

① 『日本史のしくみ』

通常は比較的安定した時期を軸に論じられる我が国の歴史を、「変革期」とそれを動かす「情報」という視点からとらえ直した本。その初版が出た当時(1976年)、日本は高度成長から安定成長への移行期で、この本はやや特異な存在でした。しかし「変革」が常態となって以降は、すでに否定された懐かしい学説も含め、日本史を構造的にとらえた、記念碑的な歴史書として読み継がれています。

この本はまた、現代の個人および組織学習のお手本でもあります。まず世代や専門分野の異なる3人が、共通の目的の下で、多彩なゲストを交えながら定期的に議論を重ねる。次にそこでの論点を整理し、その場で得た気づきを加味して、各自が小論文にまとめ、その成果を公表しているからです。

以上のようにこの本は、『日本史』ばかりでなく、いまの「知識社会」を生き抜く知恵を生み出す『しくみ』も明らかにした、異色の歴史書なのです。

② 『逝きし世の面影』

幕末から明治初期にかけ、我が国を訪れた多数の異邦人たちの見聞録を、さまざまなテーマから編集し直した、渡辺京二氏の労作。この本は、一代限りの「文明」を追体験するという著者の意図を超え、「文明開化」で私たちが失ってしまったものやその残滓を浮き彫りにしました。そのため、前世紀末の発刊以来、加速するグローバル化を背景に、私たち日本人が足元を見つめる格好の図書として、多くの知識人から注目されてきました。

また同時期、一躍注目されることになった地球環境問題において、この本はさまざまな角度から見直され、今後世界に貢献することになりそうです。なぜならこれ以上の生態系の破壊が許されない中、この本には、エネルギーや物質の浪費を最低限に抑えながら、心豊かに生きる庶民の姿やその知恵が満載されているからです。

- ① 日本史のしくみ
林屋辰三郎、梅棹忠夫、山崎正和編
中公文庫
- ② 逝きし世の面影
渡辺京二著
平凡社ライブラリー
- ③ 敗戦真相記
永野護著 バジリコ株式会社

③ 『敗戦真相記』

復刊された2002年以後、毎年「終戦」記念日に、私が必ず再読する本。著者の故永野護氏は、渋沢栄一の元秘書の一人で、戦後の政財界で5人揃って活躍した、彼の「永野兄弟」の長兄です。

さてその内容は、1945年9月の「終戦」直後に、氏が広島で行った講演をもとにしたもの。しかしそこで指摘された我が国の『敗戦』の遠因と近因、および真因は、まったくいまの有様と変わらず、現在の政財界に向けた警告と錯覚するほどです。

従って「戦後レジームからの脱却」に正しく取り組むには、まず「終戦」を『敗戦』と表記し、餓死や病死、水死が過半を占める「戦没者」の実態などの『真相』を明らかにして、それら「内因」の確認とその対策立案から始めなければなりません。そして次には、氏の指摘する『人材の端境期』を謙虚に認め、『敗戦』の「真因」としての科学的な「マネジメント」の欠如を補正し、愚挙の再発を防ぐその「しくみ」を、組織単位で考え出すのです。

その標本は、戦略家ルトワックの指摘を待つまでもなく、徳川家康と江戸幕府。それを巡る良し悪しの極論を棚上げし、“SDGs”の視座から江戸時代を見直すとき、その「マネジメント」にはヒントが溢れています。ましていまを生きる私たちには、「文明開化」によって、「科学」「技術」という「平和の武器」が与えられているのですから。

2021年5月10日 実空